

IV部 基調報告 新羅郡関連の状況

「中武蔵の土器様相」

— 須恵器・土師器からみた新羅郡 —

講師： 根 本 靖

(所沢市教育委員会)

中武蔵の土器様相―須恵器・土師器から見た新羅郡―

はじめに

中武蔵の呼称は、武蔵国の中央部で、凡そ入間郡の範囲と考えている。古代入間郡は武蔵国のほぼ中央に位置し、南には国府所在郡である多摩郡、北には、比企郡、南東を豊島郡、東は現荒川（旧入間川）を挟んで足立郡、西は秩父郡に接している。当初のおおよその範囲は、北は越辺川の流域、東は現荒川（旧入間川）、南は柳瀬川を含む狭山丘陵周辺から東の白子川流域と思われ、西は関東山地を境界としていたと考えられる。後に、入間郡を分けて霊龜二年（716）には高麗郡が建郡され、天平宝字二年（758）には新羅郡が建郡されている。

地形的には、西には関東山地の裾野に丘陵が伸びている。丘陵は北から毛呂山・高麗・加治丘陵が、最南端には独立丘陵の狭山丘陵が存在する。丘陵部から東は台地となり、山地や丘陵から派生する河川が台地を縫うように東流し、荒川水系へと合流する。郡域内の台地は入間川を境として大きく南北に分けられ、北側が入間台地（毛呂台地・坂戸台地）、南側が武蔵野台地北半にあたる。

本発表で、報告者に与えられた問題は、須恵器や土師器といった当時の土器から、新羅郡を語るができないかという問いである。志木市・朝霞市・和光市・新座市（以下「新羅郡域」という）においての遺跡から出土した土器において検証してみたい。

なお、須恵器の年代は、南比企窯の鳩山窯跡群の編年を援用して構築された「古代の入間を考える会」の編年を使用するので、期の頭に H と付くのは鳩山窯の意味である（註1）。

1. 須恵器の様相

中武蔵における8・9世紀における須恵器の様相は、武蔵国中南部から相模国に至るまで広範囲に流通する南比企窯跡群（以下「南比企窯」という）と東金子窯跡群（以下「東金子窯」という）により、須恵器卓越地域と呼ばれるほどで、8世紀中葉以降は、食膳具の90%以上を須恵器という状況を作り出した。7世紀後半から操業を始めた南比企窯は、8世紀前半に本格操業を迎える。東金子窯においても、8世紀前半には操業を開始していたことがわかっている。8世紀から9世紀にかけて両窯跡群は操業を継続する。

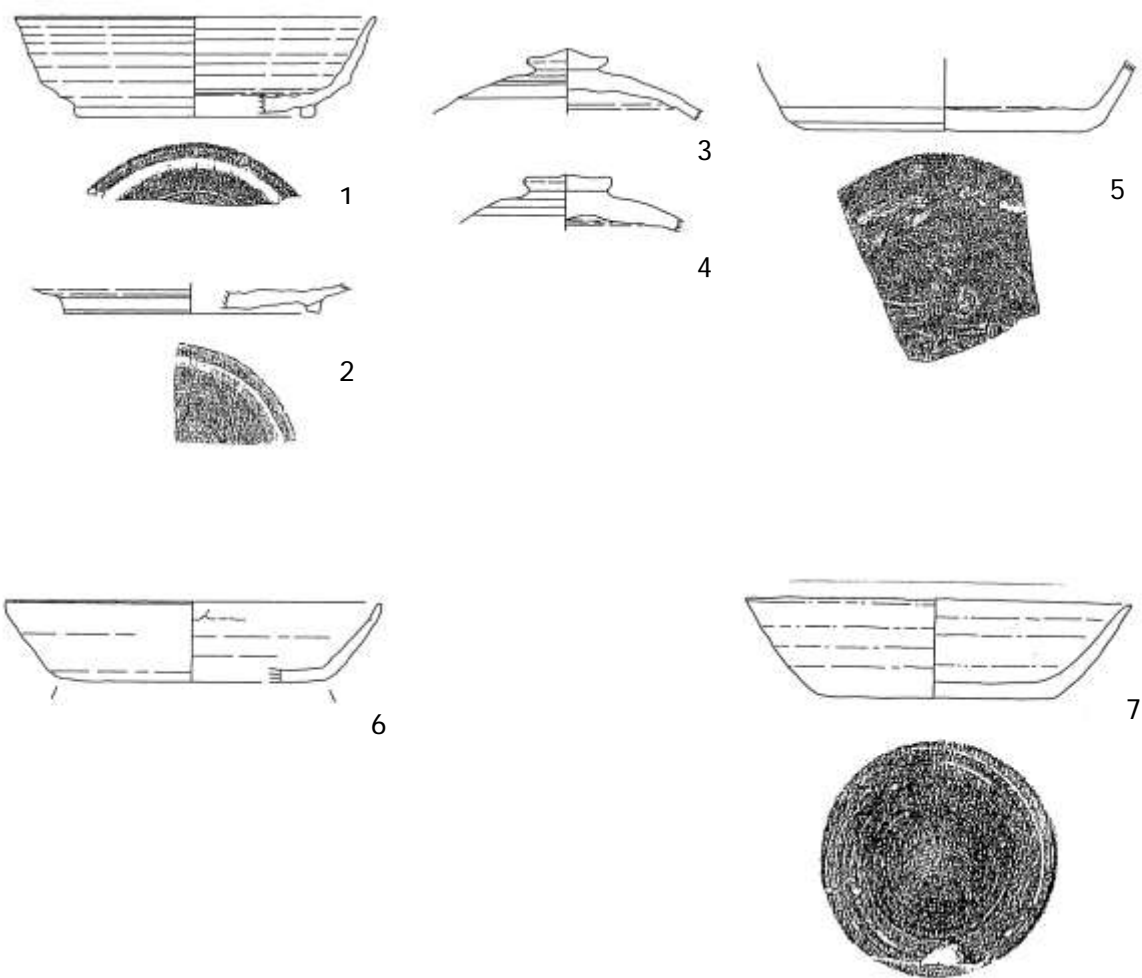
さて、新羅郡域においても、南比企窯・東金子窯の製品が主体をなすことは、入間郡内のほかの地域とほぼ変わらないであろう。時期を追って概観してみたい。

8世紀初頭では、南比企窯と東金子窯が本格的な操業前ということもあり、和光市下里遺跡第1号住居跡では、静岡県湖西窯跡の製品と、北武蔵の末野窯跡群の製品が出土している。

第1図の1、2は湖西窯の高台杯、器形は底部がやや高台より出る出っ尻気味の器形である。3、4は蓋、擬宝珠とやや扁平のつまみがつく。5は末野窯産の杯。ただ、食膳具の大半は土師器であり、須恵器は客体的だが、広域流通窯の湖西産と末野産のセット関係は、入間郡家の霞ヶ関遺跡や東山道武蔵路の駅家とされる東の上遺跡でもみられる。ただ、この時期の住居跡がこの1軒のみなのか、集落として成り立たないことが疑問である。

H I期は霊亀二年（716）には高麗郡の建郡が含まれるが、新羅郡域には住居跡からの出土はない。

H II期では、柳瀬川の右岸台地上に位置する志木市西原大塚遺跡で、南比企窯と東金子窯

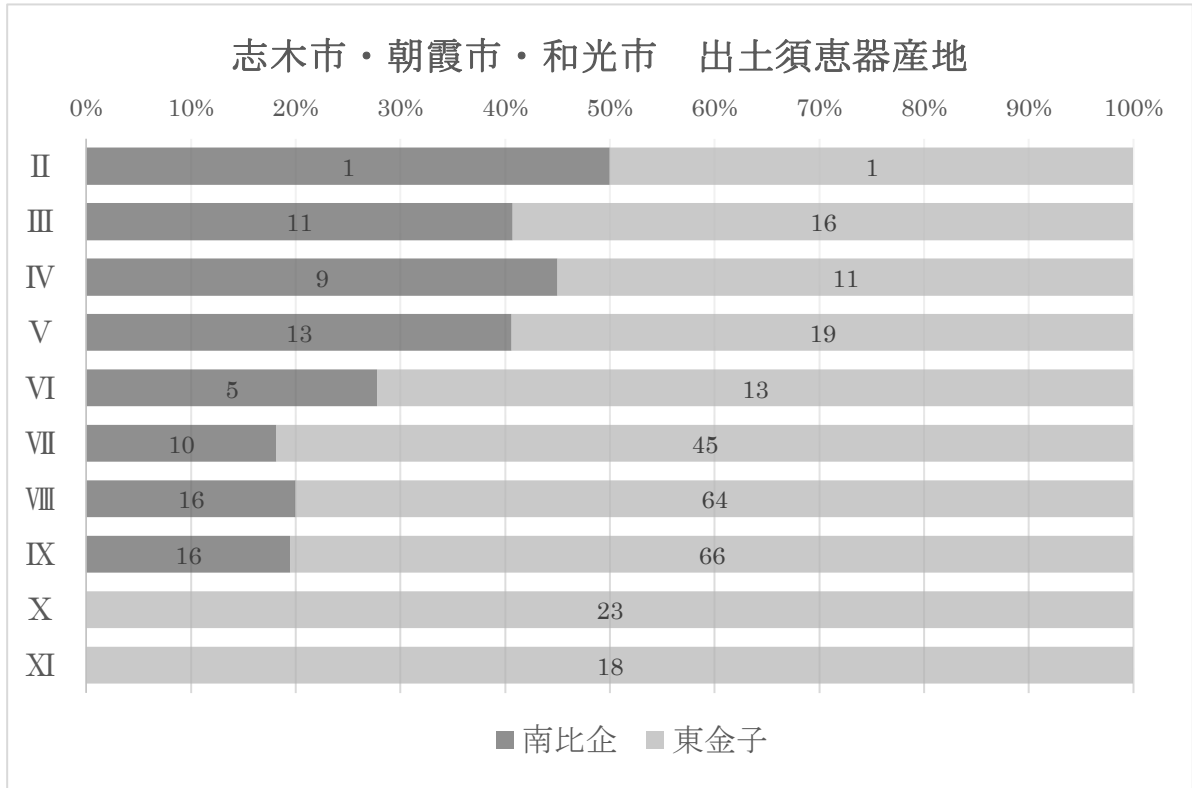


第 1 図 新羅郡域の須恵器

の製品が 1 点ずつ出土している。第 1 図の 6 は、154 次 19 号住居跡出土で南比企窯。7 は、67 次 19 号住居跡出土の東金子窯である。

HⅢ期は、新羅郡の建郡（758 年）をふくむ時期で、入間郡内でも入間川の左岸台地や高麗郡域など集落が増加する。新羅郡域でも、志木市で西原大塚遺跡と城山遺跡で、和光市でも吹上遺跡や午王山遺跡で竪穴建物が検出されているが集落を構成する要素は認められない。

HIV・V期は、8世紀後半から末葉にかけてで、新羅郡域では、遺跡数が増加する。志木市では中野、田子山遺跡、朝霞市では泉水山・富士谷、南割・西久保、宮台・宮原、中道・中道下遺跡、和光市では吹上、花ノ木遺跡がある。



9世紀に入ると、当初はやや遺跡数が減少するが、中葉から後半、HVII期以降は、複数の遺跡で竪穴建物が複数調査されたり、数軒で集落を構成するなど遺跡数が増加する。中でも和光市の漆台遺跡では、HVI期後半の東金子窯産である円面硯、「大」の墨書がある蓋が出土している。産地別にみると、グラフに現れるように、南比企窯が減少し、東金子窯が大半を占める。この現象は、入間郡の南部、東部の状況と同じである。最終的な須恵器の終末はHXI期である。

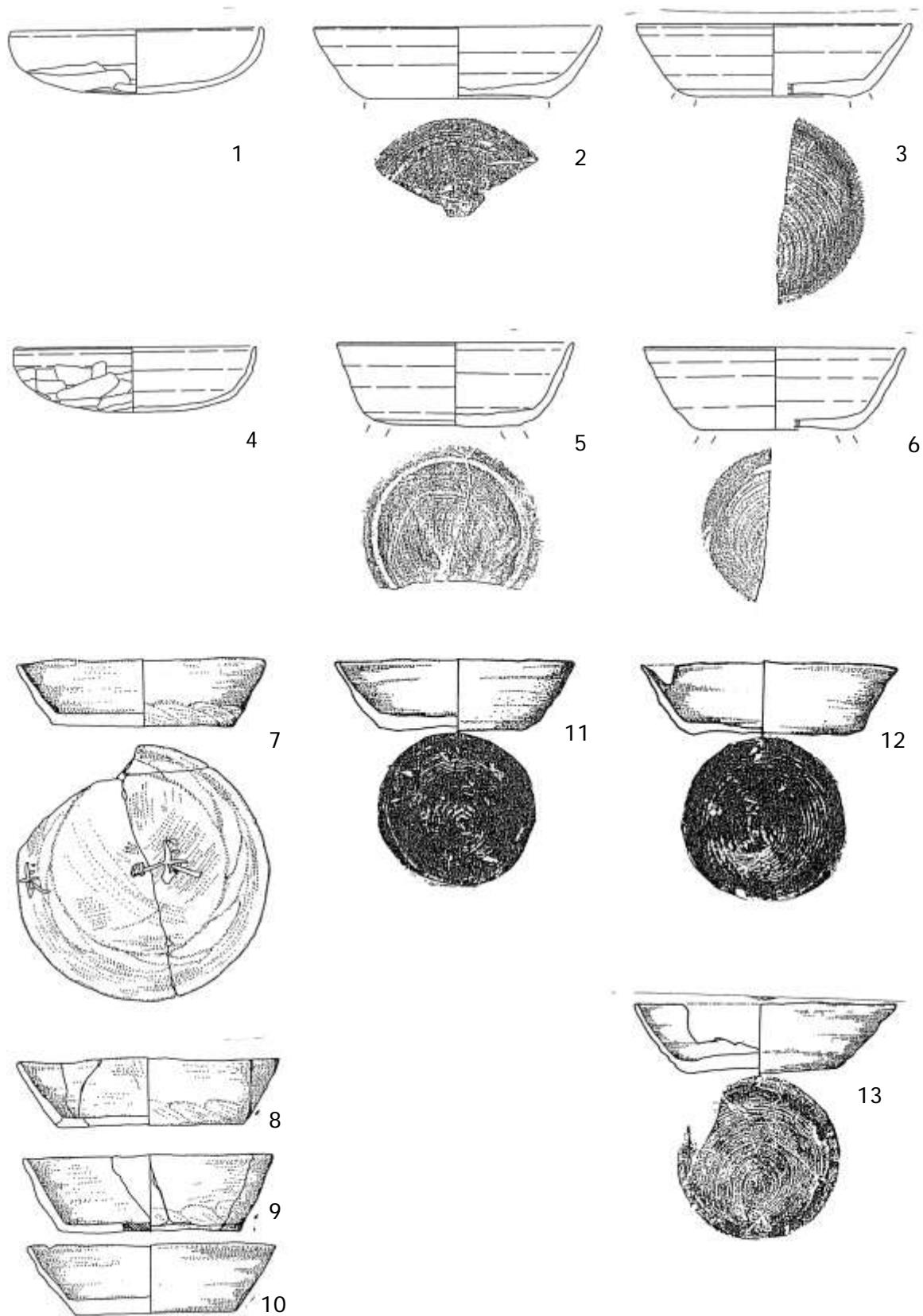
2. 土師器の様相

(1) 北武蔵型土師器坏形土器 (第2図)

入間郡内では8世紀中葉には存在しなくなるが、新羅郡域では8世紀後半まで残るようである。第2図の1～3は、和光市吹上遺跡第3次第53号住居跡出土資料で、1が北武蔵型土師器坏、2は南比企窯のHⅡ期の坏、3は東金子窯のHⅢ期初頭の坏で、年代は740年頃である。4～6は、志木市中野遺跡第91地点72号住居跡出土資料で、4が北武蔵型土師器坏、5は南比企窯、6が東金子窯で、HV期に相当し、790～810年ごろ。しかし、中心的な食膳具は須恵器となっているようで、北武蔵型土師器坏は客体的である。

(2) 在地産土師器坏形土器

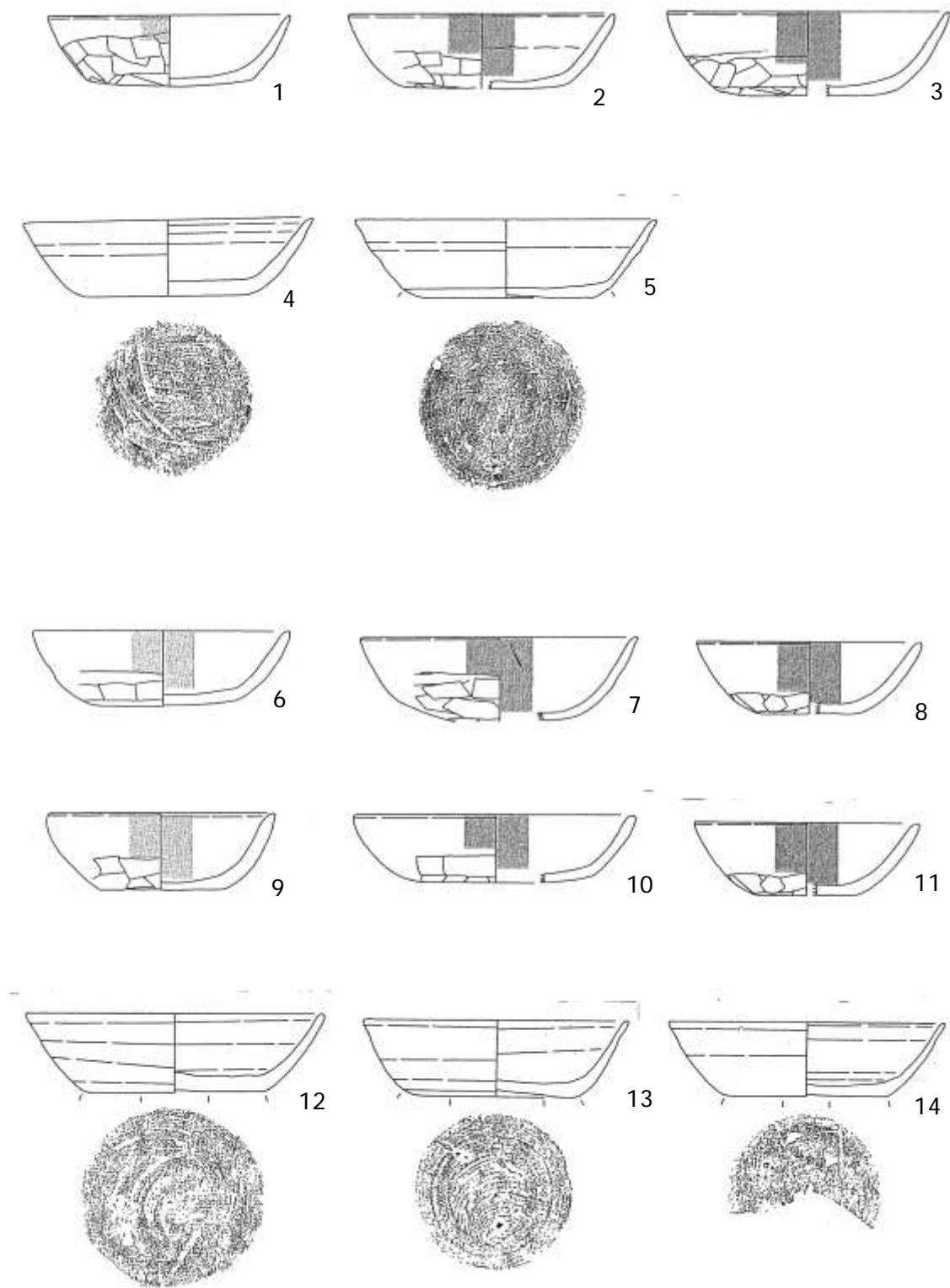
第2図7～10は、朝霞市南割・西久保遺跡の土師器坏形土器であるが、これらの土器は周辺では、清瀬市下宿内山遺跡でしか出土が確認できない土師器である。ロクロ整形で、下半部を削るものと削らないものに分けられ、底部は手持ちヘラ削りである。10が口径12.8cm、内底径8.4cmを測る。11～13は東金子窯の製品で、11は口径12.5cm、内底径8.3cm、12は、口径11.8cm、内底径7.4cm、13は口径12.8cm、内底径7.9cmで、「長」の墨書がある。11と13がHⅣ期、12はHV期か。10と11や13は、ほぼ同法量となるので、土師器坏の年代はHⅣ期に比定される。田代雄介は、古墳時代から続く在地土師器坏の系譜に須恵器の技法を用いたものと述べられている(註2)。しかし、あきらかに須恵器を模倣した在地生産の坏であり、分布が広範囲に広がらないことを考えると、特定の集団が自分たちのためだけに製作した土師器坏と考えざるを得ない。どのような集団なのか不明である。



第2図 北武蔵型土師器・在地産土師器器坏

(3) 落合型土師器坏形土器 (第3図)

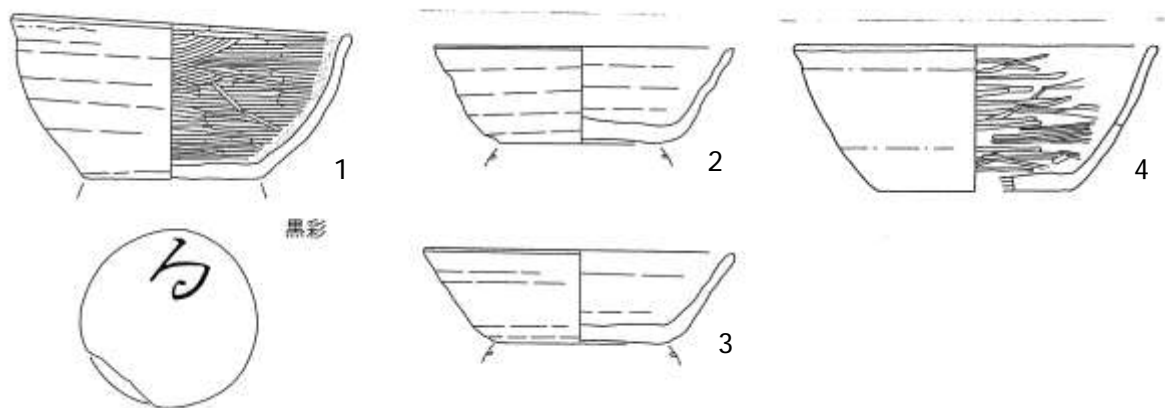
和光市吹上遺跡では、落合型土師器坏形土器が出土している。第13号住居跡では3点、第29号住居跡では6点が図化されている。1～5が第13号住居址出土土器、6～14が第29号住居跡出土土器である。須恵器をみると第13号住居跡の2点とも東金子窯で、4が口径13.8 cm、内底径8.2 cm、5が口径14.5 cm、内底径9.4 cmを測る。底部は全面ヘラ削りで、時期的にはHⅢ期に含まれる。落合型土師器坏形土器は、いずれもやや平底気味であるが、内面と外面ナデ部分に赤彩を施し、外面に輪積痕を残す、典型的な落合型である。第29号住居跡では、須恵器は12が東金子窯、13・14が南比企窯である。12が口径14.1 cm、内底径8.7 cmのHⅢ期前半、13が口径12.5 cm、内底径8.1 cmでHⅣ期前半、14が口径13.0 cm、内底径8.8 cmのHⅢ期中から後半である。落合型は6のようなやや稜のような痕跡をとどめるもの、8、9、11のような平底、7、10のやや丸底気味など多様であるが、どれも内面と外面ナデ部分に赤彩、輪積痕ありと落合型の特徴を表している。落合型土師器坏形土器は、新宿区落合遺跡で土器焼成坑が調査されて生産地が確認されている土師器であり、主体的に出土するのは落合遺跡周辺と北区御殿山遺跡周辺である。北区御殿山遺跡は豊島郡家に比定されており、豊島郡の土器と言えなくもない。また、武蔵国府でも出土するほか所沢市東の上遺跡でも出土が確認されている。吹上遺跡では、須恵器と同量の出土があることから、この2軒だけにとどまるとは思えないが、付近の集落からの出土がない状況では判断付きかねる。



第 3 図 落合型土師器坏形土器と供伴須恵器

(4) 黒彩土器 (第4図)

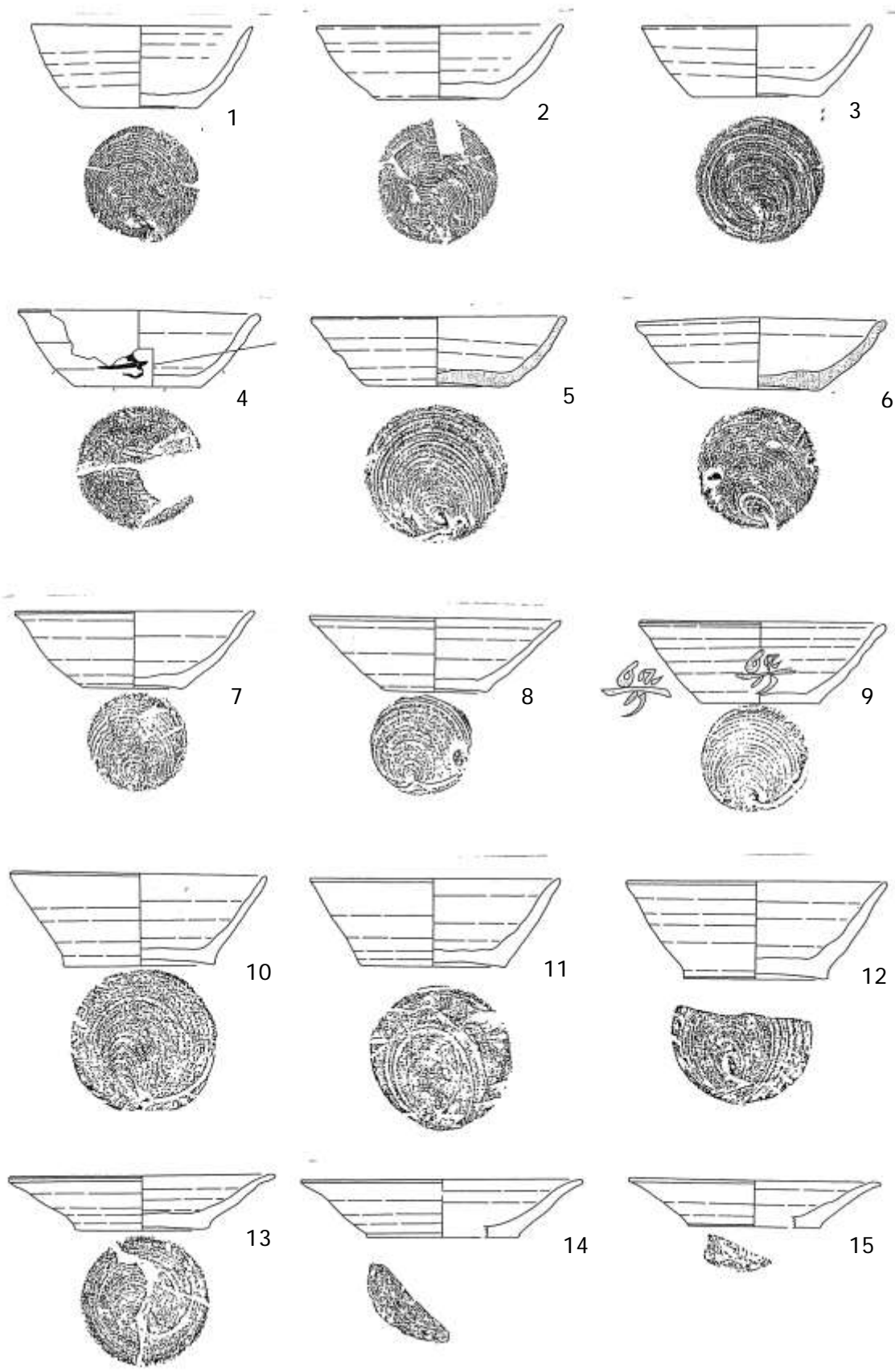
志木市田子山遺跡からは、内面を黒色処理し、丁寧に磨いた黒彩土器が出土している。1は93次調査68号住居址出土の黒彩土器で、同じ住居址出土の須恵器は東金子窯である。2は口径11.5cm、内底径7.1cm、3は口径12cm、内底径7.2cmを測る。3がHIV期後半、2がHV期後半に比定される。4は4次調査4号住居跡から出土したもので、須恵器の供伴はない。どちらも胎土に白色針状物質を含むものである。内面の黒色処理など、北関東型のロクロ土師器に収まるものか判断できない。黒彩土器は出土するが、白色針状物質を含有する胎土のものは管見にない。



第4図 新羅郡域の黒彩土器と供伴須恵器

(5) ロクロ土師器 (第5図)

和光市市場峡・市場上遺跡や峯前遺跡、花ノ木遺跡などではロクロ土師器が多く出土している。一番古い時期と思われるのが市場峡・市場上遺跡の8次第6号住居跡出土土器で、1がロクロ土師器、2が南比企窯、3が東金子窯の須恵器である。2は口径12cm、内底径5.9cm、3は口径11.3cm、内底径6.2cmで、HVII期に位置付けられる。4～6は○次53号住居跡出土土器で、4がロクロ土師器、5、6は東金子窯の須恵器である。5は口径12.4cm、



第 5 図 新羅郡域のロクロ土師器と供伴須恵

内底径 6.3 cm、6 は口径 12.1 cm、内底径は 6 cm で、HVII 期である。7～15 は峯前遺跡 5 号住居跡出土土器で、7～9 が東金子窯の須恵器、10～15 がロクロ土師器である。7 は口径 12.2 cm、内底径 4.3 cm、8 は口径 12.8 cm、内定径 4.9 cm、9 は口径 12.7 cm、内底径 4.6 cm を測る HX 期の製品である。

ロクロ土師器は、和光市周辺で HVII 期（9 世紀前半から中頃）から出現し、10 世紀にかけて須恵器と同じように使用されていたようである。

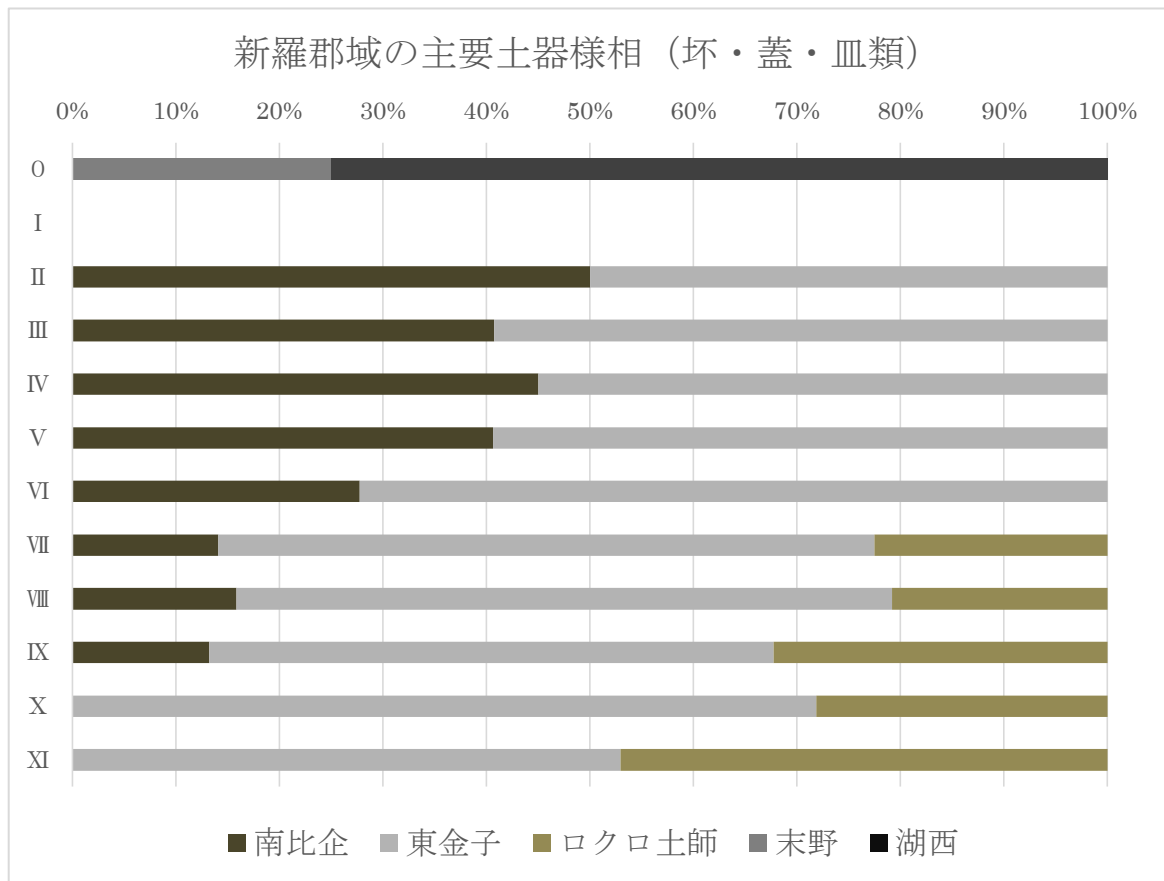
これらのロクロ土師器は、さいたま市の下野田稲荷原遺跡周辺に分布する下野田稲荷原型に類似しているように見える。機種構成も峯前遺跡の坏と皿の組み合わせは、下野田稲荷原遺跡出土の機種構成と同様である。坏の器形も底部が広がるものがあるなど近似している。

下野田稲荷原遺跡周辺のロクロ土師器について、山田尚友は、9 世紀中葉になって焼成され、広がり、最後は（中略）9 世紀後半から 10 世紀前葉に終焉すると述べており、和光市の出現時期と終焉が同時期であると言える（註 3）。また、昼間孝志は、ロクロ土師器が大宮台地の東部にその生産地と分布があり、下野田稲荷原遺跡周辺での自給自足的で、余剰分が周辺域の外へと流れたとしている（註 4）。

3. 土器からみた新羅郡

新羅郡域の須恵器・土師器を概観してみたが、新羅郡に関わるような特殊な土器などは見ることができなかった。高麗郡での飯能市堂ノ根遺跡の新治産須恵器などのような、地域色を見いだせるものもなかった。

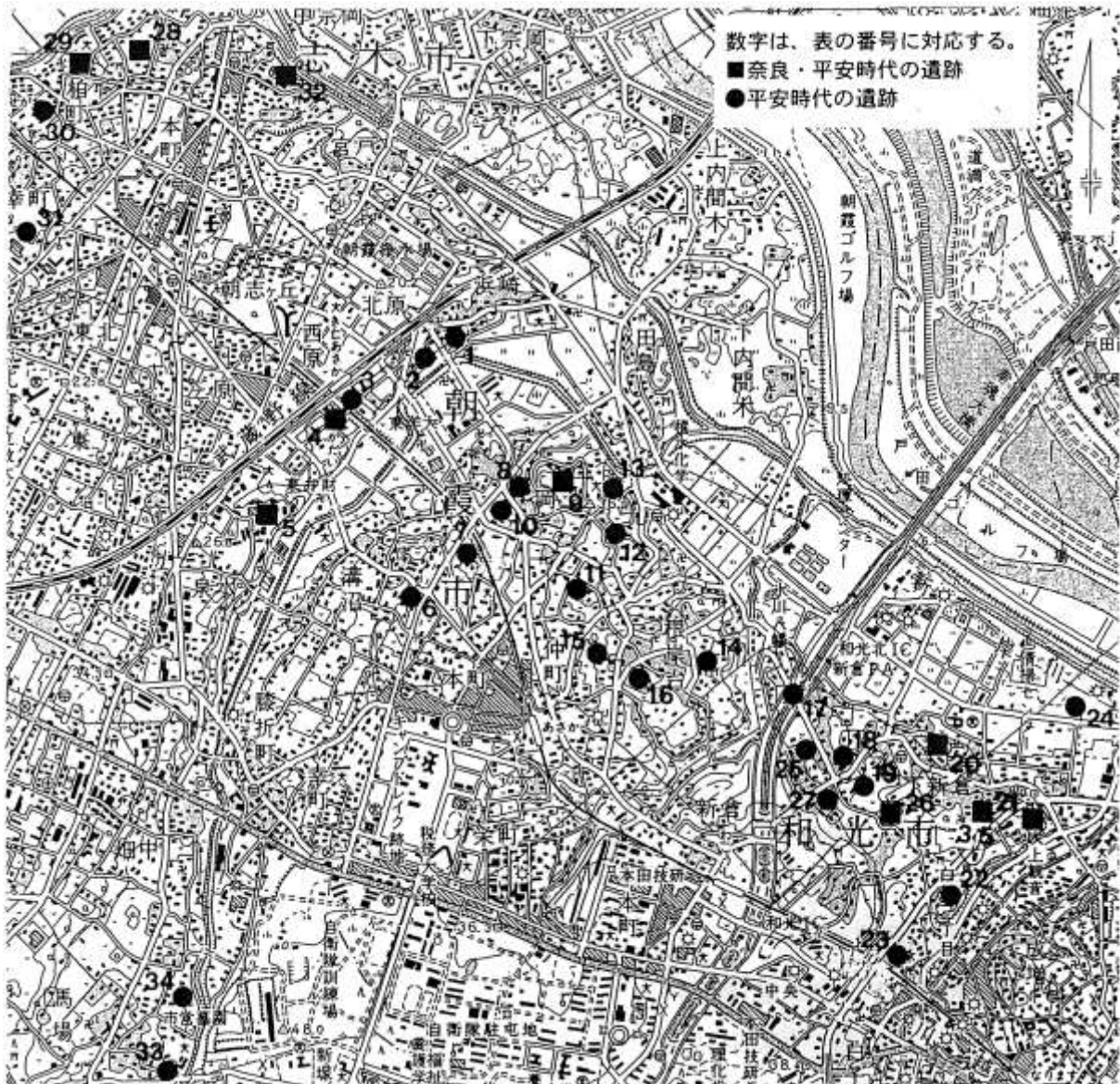
新羅郡域の須恵器の産地、及びロクロ土師器のなかで、坏、蓋、皿類のうち時期がわかる



ものを点数化したグラフによれば、南比企窯は少なくなりながらも9世紀末葉まで残り、東金子はHII期から徐々に出土点数が増加し、10世紀前半まで出土が確認される。ロクロ土師器はHVII期から出現し、徐々に数を増やしながら10世紀前半まで出土する。

ロクロ土師器の出土は志木市ではHIX期からで、しかも単発的であるが、和光市では、HVII期から継続的に出土が認められ、HXI期には須恵器よりも数量が多くなる。ロクロ土師器がさいたま市の下野田稲荷原型ならば、周辺地域に浸透しないロクロ土師器が和光市にもたらされたかを解明する必要がある。

土器様相と遺跡分布図を見ると、新羅郡域の東部（和光市）の遺跡群では、落合型土師器坏から豊島郡の影響もあり、ロクロ土師器からは対岸の足立郡の影響も考えられる。逆に西



第 6 図 新羅郡域の奈良・平安時代の遺跡分布図
(鈴木 2015 から引用)

第 6 図 新羅郡域の奈良・平安時代の遺跡分布図 遺跡名

- 1 中道・中道下遺跡 2 西久保・宮山遺跡 3 北割・西原遺跡 4 南割・西久保遺跡
- 5 泉水山・富士谷遺跡 6 行人塚・金子塚下遺跡 7 諏訪原・中道遺跡 8 中道・岡台遺跡
- 9 向山遺跡 10 榎戸・諏訪原遺跡 11 宮原・塚越遺跡 12 宮台・宮原遺跡 13 宮台遺跡
- 14 稻荷山・郷戸遺跡 15 馬堀遺跡 16 向原・中笹原遺跡 17 花ノ木遺跡 18 峯前遺跡
- 19 四ツ木遺跡 20 午王山遺跡 21 吹上遺跡 22 市場峡・市場上遺跡 23 城山遺跡
- 24 榎戸遺跡 25 峯遺跡 26 仏ノ木遺跡 27 漆台遺跡 28 中道遺跡 29 城山遺跡
- 30 中道遺跡 31 西原大塚遺跡 32 田子山遺跡 33 馬場南遺跡 34 駒形遺跡
- 35 漆台遺跡

部（志木市・朝霞市の黒目川左岸）の遺跡群は南割・西久保遺跡の在り土器器坏があるが、入間郡的な土器様相を堅持しているようにも見える。この東西のまとまりのほぼ中央の遺跡群（朝霞市）が何らか重要な立地が想定できないだろうか。

いずれにしろ、新羅郡の建郡とともに、この地域の変化については、土器からはいふことができなかったという結論を述べて、今後の課題としたい。

註1：古代の入間を考える会での、8～9世紀の鳩山窯跡と東金子窯産須恵器編年を自分なりに解釈し、以下のような時期を想定している（あくまでも報告者の見解であり、今後、変更されることがある）。

HI期 705 ～ 725年 HII期 725 ～ 745年 HIII期 745 ～ 770年 HIV期 770 ～ 790年
HV期 790 ～ 810年 HVI期 810 ～ 830年 HVII期 830 ～ 850年 HVIII期 850 ～ 870年
HIX期 870 ～ 890年 HX期 890 ～ 910年 HXI期 910 ～ 930年

註2：田代雄介 2002「朝霞市南割・西久保遺跡出土の土器器坏形土器について」『あらかわ』第5号あらかわ考古談話会

註3：山田尚友 2013「さいたま市緑区の下野田地域の古代―「ロクロ土器とその周辺 その1―」『あらかわ』第15号 あらかわ考古談話会

山田尚友 2015「さいたま市緑区の下野田地域の古代―「ロクロ土器とその周辺 その2―」『あらかわ』第16号 あらかわ考古談話会

註4：昼間孝志 2006「ロクロ土器の流通―ロクロ土器からみた武蔵国東部の古代社会―」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊9 埼玉考古学会

【引用・参考文献：報告書は図版にしたものだけを載せた】

尾形則敏 2017『中野遺跡第91地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第67集

鈴木一郎 2003『吹上遺跡（第3次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第30集

鈴木一郎 2015「和光・朝霞市域の奈良・平安時代の集落遺跡―主に8世紀から9世紀を中心として―」『あらかわ』第16号 あらかわ考古談話会

渡邊五夫 1973「第二西久保遺跡発掘報告」『朝霞の文化財』第四集

佐々木保俊 1992「田子山遺跡第4地点」『志木市の文化財』第18集

尾形則敏 2009「田子山遺跡第93地点」『志木市遺跡群18』志木市の文化財第41集

鈴木一郎 1994『峯遺跡・峯前遺跡』和光市埋蔵文化財調査報告書第12集

鈴木一郎 2010『下里遺跡（第1次） 市場峡・市場上遺跡（第9次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第41集